

に」と言われた。舞鶴では着てきた物は全部焼却され、裸になりリュックサックに荷物を詰め、日本国どこへも行ける切符を支給され、食事代として二、三百円くれた。また着る物は新しい物を買って、やっとさっぱりとした気持ちになれた。

その後、県庁へ行って検査を受け、金は国債十万円と、銀杯、海部総理名の書状を頂いた。

今も体は元気でダンス、カラオケなどで心を安めている。

私は、満蒙開拓団にいたから、強い肉体となり、寒さにも耐えられ、生きて帰ることができたのである。内地から、満州・シベリアへ来た人が、多く死んでしまったことを思うと、私は、心身を鍛えたお陰で、生き残り、今日の幸を得ることができたのだと、感謝の日々を送っている。

死ぬべき命永らえて

往時を想う

愛知県 小川 肇

大正八（一九一九）年九月十九日、名古屋市中区で生まれ、昭和十六（一九四一）年四月、名古屋で徴兵検査を受け甲種合格となった。昭和十四年の徴集兵であるが、学業のため二年延期したわけで、大東亜戦争が開始されたことによって名古屋の歩兵第六連隊へ入営となった。従って、兵籍簿には昭和十七年一月十日、陸軍二等兵、第二十九師団歩兵第十八連隊要員として、歩兵第六連隊補充隊第三中隊に入営と記されている。本隊の第三師団歩兵第六連隊でなく、第二十九師団歩兵第十八連隊（豊橋）に入営したのである。

初年兵の教育を受けている時の四月、米軍のB25爆撃機による本土空襲があり、我々の戦地出発

が四月二十三日まで延期されたのである。そのため、兵籍簿にあるごとく、我々歩兵第十八連隊要員は、四月二十三日、名古屋衛戍地出發となる。

四月二十四日、宇品港出發、四月二十八日、吳淞沖通過、五月三日、漢口上陸、五月四日、黃陂到着、第三中隊に編入とある。この日はじめて第二十九師団第十八連隊の駐屯地兵舎で戦地第一日目を迎えたのである。入営以後僅か四カ月足らずで戦地に着いたわけで、西も東も判らぬ我々としては、戦場に着いたので緊張の日々であった。

その時は既に浙贛作戦の最中であるから、我々初年兵も直ちに作戦参加ということであった。この作戦は、日本本土を初空襲した米軍機が日本本土爆撃をした後中国の航空基地に逃げ込んだことで、その中国軍航空基地を攻撃するのが、任務であった。

この作戦が、我々にとつての初陣ということになるが、初めて実弾の入った銃を担いで、戦場に

入ったのであるから、緊張の連続であった。

作戦中は、毎日が雨で、泥だらけになりながら、雨は外套を通して軍衣を濡らし、汗と共にびしょびしょになりながら、重い足を運ぶのである。泥水を含んだ軍靴の重いことを実感しました。軍隊とは、戦地とは歩くことだと、兵の苦しみを、いやと言う程味わいました。

毎日の雨で、行けども、行けども敵が見えない。飲料水は無く、池の水の上澄みを水筒に入れて持ち歩いた。雨が止めば、山の上から敵が射撃してくる。この敵を攻撃し、我々も山へ登った。

不足したのは飲み水ばかりではなく、食糧の補給がつかず、食うや食わずで水腹であったが、その飲み水が無くなるのだから苦勞をしました。しかしながら、我が軍が強かったから、敵は退却して行ったため、戦死者は少なかった。同年兵で戦死した者は余りいなかったようだ、と後に戦友から聞いた。

このような戦闘が、第二次、第三次と続いて、

初年兵もだんだんと戦いに馴れて来たが、行軍と、飲み水、食料、そして降雨には随分苦勞したものであった。作戦は、五月四日から八月十四日まで、三カ月余の期間である。初夏から盛夏までの作戦だったから、暑さは、体力を消耗し尽くすのだが、我々も若かったので倒れずに、無事任務を完了することができたのであろう。

私は名古屋の第三師団、歩兵第六連隊に入ったが、実際は、第二十九師団第十八連隊要員であった。第二十九師団は新設師団である。大東亜戦争開始前に、我が陸軍の編成は、一個師団は四個連隊編成から三個連隊編成へと改編、特科部隊が充実され、各師団は近代化のための措置であったと後に知った。

第三師団の第十八連隊は、第二十九師団へ編成替えとなり、私は本来はこのサイパン玉砕の師団である。私はそのままの編成であれば、南洋で玉砕していたことになったと後で聞いた。運とはいえ、まさに、軍隊とは運隊の言葉通りであった。

第二十九師団は豊橋の第十八連隊、奈良の第三十八連隊、松本の第五十連隊の編成である。その軍歴から見ると誠に不運の師団であった。

浙贛作戦以降の私の正式軍歴は戦時名簿より転記すれば次のごとくであった。

昭和十七年

七月十日 陸軍一等兵、同八月二十日 編成
完結。

八月二十日 歩兵第十八連隊第三中隊に編入。

同二十一日、昭和十七年度、第二次兵科幹部候補生を命ぜらる。同日、満州駐屯のため

黄陂出發。

九月一日、山海関通過。

自 四月二十八日 至 九月一日

大東亜戦争支那方面勤務に従事。

昭和十三年内閣告示第四号による加算年三年。

昭和十六年陸支普第一二二七号による加算年二年。

九月二日 海城着。

十月十日 奉天省海城駐屯。

十月十日 兵科甲種幹部候補生を命ず。

同日 上等兵の階級に進む。

自 九月十七日 至 十一月三日

連隊集合教育参加。

十一月四日 久留米第一陸軍予備士官学校入

校のため海城出発。

十一月五日 安東通過。

十一月七日 釜山出発。

十一月八日 門司上陸。

十一月十日 久留米第一予備士官学校へ入

校。

十二月一日 伍長の階級に進む。

昭和十八年

二月一日 軍曹の階級に進む。

四月二十八日 教育終了。

同月同日 曹長の階級に進め、見習士官を命

ず。

四月二十九日 久留米出発。

五月一日 歩兵第六連隊補充隊に転属。

同月同日 第四中隊付。

五月八日 歩兵第六十八連隊補充隊に分遣。

昭和十八年七月三日 昭和十八年五月、軍令

陸甲第四五号により歩兵第一三五連隊に転

属。

同月同日 第五中隊に充用。

七月十日 編成完結。

九月三十日 教育終了に付帰隊。

同月同日 第二中隊付。

十月一日 将校勤務を命ず。

十一月三十日 現役満期除隊。

十二月一日 少尉、予備役編入。

同月同日、引続き臨時召集により歩兵第一三

五連隊に応召第二中隊付。

昭和十九年

三月十一日 第三中隊付。

四月一日 筑城要員第二次補備教育のため陸

軍築城本部横須賀出張所に分遣。

四月二十日 軍令甲第三九号により臨時動員に着手。

四月二十一日 歩兵第六連隊補充隊第三中隊付に充用。

四月二十五日 動員完結。

五月二十九日 第七中隊付を命ず。

七月八日 軍令陸甲第七七号により臨時動員に着手。

同月同日 歩兵第一九六連隊第七中隊付に充用。

七月十日 臨時動員完結。

八月二十日 中尉。

昭和二十年

九月七日 召集解除。

私は昭和十九年四月一日、築城要員第四次補教育のための築城本部横須賀出張所分遣となったが、ここでは海岸の穴掘りであった。

山の奥に砲陣地を作り、角度、上・下に銃眼を作る。部隊は静岡、相模、サイパンの動員は完結したが、私はその頃築城本部より電話があり、沿岸防備のため、久能山の下へ、二〇センチ加農砲を備える作業などに従事した。そのため、私のサイパン行きは免れたのである。予備士官学校の成績のお陰で動員に免れたということの後になって知った。

私は本来、サイパン、テニアンへ行くべき立場であったが、運命によってそれを免れ、死から免れたのである。

米軍攻撃、上陸のため包囲され、島に残った隊員は、水が無くて苦しんだのである。そのため、現在も、「マリアナ献水慰霊会」という会があり、名古屋の護国神社境内に、献水のための碑がある。神社参拝者や、マリアナ生き残りの方々や、戦没遺族により、毎日のように献水がかかさず続いている。私もその会員として、戦死を免れた一人として水を献げている一人である。

私は奇跡とも言える運命の巡り合わせか、死ぬべき命永らえて、本日の泰平の日々を送らせて頂いている。

なお、サイパン、テナアン、グアム島における玉砕部隊の編成、第三十一軍の編成表は次のごとくであります。

軍司令官 陸軍中將 小畑英良（グアム島にて戦死）

同参謀長 井桁啓治少将（サイパン島にて戦死）

第三十一軍

（サイパン、テナアン、グアム、トラック、ポナペ、モートロック、メレヨン、ロタ

島）

第二十九師団長（雷部隊）高品彪中將

（グアムにて戦死）

歩兵第五十連隊長（松本）緒方敬志大佐

（テナアン島にて二八〇〇人戦死）

第一大隊 松田和夫大尉、第二大隊 神山新

七大尉、第三大隊 山本好江大尉

第十八連隊長（名古屋）大橋彦四郎大佐

（グアム島にて二八〇〇人戦死）

前任 門間健太郎大佐（崎戸丸にて海没死）

第一大隊長 松下清一大尉（サイパン島にて戦

死）

第二大隊長 丸山忠左大尉（グアム島にて戦

死）

第三大隊長 行岡節生少佐（グアム島にて戦

死）

第三十八連隊長（奈良）末長常太郎大佐

（グアム島にて二九〇〇人戦死）

第四十三師団長 齊藤義次中將（譽部隊）

（サイパン島にて一六〇〇〇人戦死）

第一一八連隊長 伊藤豪大佐

（静岡―サイパン島にて六月四―六日 海没

二二四〇人）

第一二五連隊長 鈴木栄助大佐

(名古屋―サイパン島にて譽第一一九三四部隊)

第一大隊長 和泉文三大尉

(テニアン島にて九五〇人)

第二大隊長 永田勲大尉(サイパン島にて戦死)

第三大隊長 野田義弘大尉(サイパン島にて戦死)

第一三六連隊長 小川雪松大佐(岐阜―サイパン島にて戦死)

海軍、中部太平洋方面艦隊司令長官

南雲忠一中将(サイパン島にて戦死)

第一航空艦隊司令長官 角田覚治中将

(テニアン島にて戦死)

なお、陸軍各部隊とも軍旗奉焼の日を終戦記念日として、往時を忍んでいるのであります。

戦争を知らない二年半

福岡県 八山 太四郎

私は福岡県三潞郡三潞町大字高三潞、八山音吉の長男(姉二人がおります)として、大正十一(一九二二)年十一月三十一日出生しました。昭和十二(一九三七)年三月、三潞尋常高等小学校を卒業し、引き続き三潞町青年学校本科五年と研究科を卒業しました。当時は、若い者は農業の傍ら青年学校に通学し、軍事教練を学び軍隊への入隊に準備致しました。

家業は一町一反の農地に米、麦を作ることを専業と致しておりました。父親を九歳の時に亡くし、母親ユミが二人の姉と私三人を養育しながら田畑を耕作し苦労しておりました。近所の人達からは男勝りと評判されておりましたが、昭和十八年三月下旬、私に召集令状の赤紙が来ました時に